

# 今も残る手掘の水路トンネル

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

**山** 梨県の河口湖は、富士山を望める景勝地として、富士五湖のなかでも早くから観光地化された。しかし、この湖は溶岩流による堰止湖であるため、天然の排水口がなく、大雨が降れば水があふれ出し、湖畔の村々は度々の水害に苦しめられていた。

一方、嘯山をへだてて河口湖の南東に位置する新倉村は、川からの導水が困難な場所所であり、しかも剣丸尾と呼ばれる透水性の溶岩台地であるため、満足に水田を拓くことができなかった。このように両者は、直線距離にして二キロも離れていないのに、全く正反対の水問題を抱えていた。

今から約三〇〇年前、この地方の領主であった秋元喬知は、嘯山に水路トンネルを穿てば河口湖の水を新倉村に導くことができ、一挙両得の解決策になると考え、排水と灌漑用水を兼ねた「新倉掘抜」の工事を計画したという。当時の史料はほとんどなく、工事が行われた時期も諸説あるが、おおよそ延宝年間（一六七三〜一六八一）に着工され、延長約三キロのトンネルが、元禄年間（二六八八〜一七〇三）初頭に完成したと考えられている。しかし、河口湖の水量は一定せず、さらに掘抜内では崩落や漏れ水が起こったため、領主の国替えとともに廃坑となった。

それから約一五〇年後の弘化四（一八四七）年、新倉掘抜の所在は不明となっていたが、山崩れによって新倉村側の坑口が見つかったので、新倉村民は掘抜内を浚渫すれば水が通ると喜び、祝い酒に大いに酔った。しかし、掘抜は崩落箇所が多く、いたる所に新規の堀廻しを施さなければならぬ大工事となった。高額に跳ね上がった工費に苦しみながらも、この工事は嘉永六（一八五三）年に完成し、東京ドーム半分ほどの新田を拓くことが出来た。

しかし、さらに苦難はつづき、完工わずか一年後に河口湖が大減水となり、さらに掘抜の崩落も起き、改修工事が必要となった。工事は文久三（一八六三）年に着工し、二年半後の元治二（一八六五）年に完成した。こうして掘抜は、新規の堀廻しも合わせて延長約三・六キロにもおおよぶ長大なものとなった。嘉永六年に完成した工事とはほぼ同額にまで膨らんだ工費については、大型の無尽講を起すなどして工面したが、二度におよんだ掘抜工事によって新倉村は莫大な財政負担を抱えることとなった。

新倉掘抜は、大正二（一九一三）年に山梨県営の新トンネルが開通すると役目を終え、わずか五十年ほどしか機能しなかった。しかし、このような大規模な工事が、為政者の直轄や町人請負ではなく、わず

か二五〇戸の村の自普請で成し遂げられたとは驚くべきことだ。

河口湖の掘抜取水口付近にある新倉掘抜史跡館では、当時の掘抜を五十センチほど見学することができる。ところどころ泥水が染み出す壁面にはノミやツルハシの跡が、当時のまま刻まれている。この史跡館は、近世の手掘水路トンネルを気軽に見学できる貴重な施設であり、史跡館前の湖畔県営駐車場内に建立された記念碑と合わせて、立ち寄る価値が十分にある。



新倉掘抜記念碑

[交通] 富士急行 河口湖駅より徒歩約15分

※ 碑文の全文は日建連HPに掲載しています。